

## はじめに

この本は、僕がどうしても研究者になりたいと思ったのか、そして、それをどのように実現しようとしてきたかを、できるだけ科学の内容に即して描こうとした本である。小さいときから自然に親しんで動物が好き、あるいは、虫が好きといった人々がいて、そのなかには大成された立派な生物学者が多くいることは周知のことである。では、小さなころからそのような経験を踏まなければ人は研究者にはなれないのだろうか。

小さいときから研究者になる訓練を経なくても研究者になることは可能であることを示したくて僕はこの本を書いた。他の人に比べて特に「独特」であつたわけではなく、生物学者になる条件を数え上げれば、むしろ普通で、出発にも多くのハンディを背負っていたと思われる。都会育ちで、自然に親しむ環境ではなかった。虫採りも夏休みなどで機会があればそれなりに興味をもつた時期はあつたが、小学生の上級生になるにしたがつて自然消滅してしまった。生物学者になる準備の人生としてはきわめて普通の少年時代であつた。

四歳のときに父が亡くなったので、その後大学に入学するまでは母・富士子と妹・百合子の三人で仲良く暮らしていた。母は外で働く必要がなかったので「社会」を家庭に運ぶ人がおらず、家庭

は閉ざされた空間のなかで平和と安定とに支配されていた。

最初の人生のルートからの逸脱は、大学入学直後に演劇に入れ込んだことである。学業もなにもかも放り出して、なんの迷いもなく演劇三昧の生活ができたのは、現在のように管理が末端まで行き届きルートをはずれることが罪悪視されるような息苦しさに取り囲まれていなかったという時代的な背景もあると思うが、なによりも父親がいなかったことが大きかったのではないか。道を逸脱しても、人生について大所高所から忠告してくれるような大人が身近にはいなかった。したがって、現在までの人生の新しい選択も変更もすべて自分一人だけで決めてきた。

演劇に参加したという経験は決定的であった。参加して学んだことは、「これこそが生きているということだ！」というエキサイトメントであった。お金持ちになりたいとは思わない、いわゆる出世をしたいという気にもなれない、ただエキサイトメントだけを感じながらこれからの人生を過ごすことは可能だろうか。演劇の世界に深入りした仲間も多くれたが、僕自身は演劇の世界で生きることが考えられなかった。役者に向いていないことがわかっていたからである。科学者になりたと思うたのはこのとき。東大にはいるのに一浪してさらに二年留年しているので、駒場の教養課程の二年生のときで二二歳であった。

科学者になりたいという思いがより具体的な過程として視野にはいつてきたのは、西村 すすむ 先生の知遇を得て、東大薬学系研究科の大学院生として国立がんセンター研究所生物学部で研究をするようになってからである。すでに二五歳になっていた。

西村先生は、一九五五(昭和三〇)年に東大理学部化学科を卒業後、ウイスコンシン大学に留学し、

ゴービン・コラーナの研究室で遺伝暗号解読の研究で中心的な役割を果たしたことで有名である。六八年にコラーナはこの仕事でノーベル医学・生理学賞を受賞している。帰国後は、国立がんセンターでtRNAの研究に転じ世界的な研究拠点を形成した。初めてお会いしたのは七二年の秋、先生四一歳のとき。これから修士の一年生として研究を開始しようとする学生に、研究者を相手にするような話し方をされたのが印象的であった。Q塩基という非常に複雑で珍しい微量塩基成分をtRNAからとりだし、いまその構造決定をしようとしていることを熱心に説明されていた。

張り切って始めた大学院生の生活であつたが、博士課程の一年が終わる直前までの三年間は、ほとんどなんのデータも出すことができなかった。研究者にはなりたいが歳はとんとんとし、「研究者になれるだろうか」という疑心に苛まれた焦燥の時期であつた。

一時的に滞在していた杉村 隆先生の研究室をでて、西村研に戻つてなにをしようかという不安定な時期に、先生からファークス論文の追試の話が舞い込んだのである。最終的に博士号取得までの二年間、先生の指導のもとで行つた「微量塩基成分Qの生合成機構」の関連の研究で八報の第一著者の論文を出版している。実験し、データを見、仮説を立て、実験をする。そのプロダクティブなエキサイトメントの過程が、研究者としての僕を育てた。その後筑波大で職を得てからのSINE(短い散在性の反復配列)の発見と東工大でのその発展を含むすべての研究スタイルは、職員・学生さんを巻き込んだの変奏である。Q塩基の研究が成就しなければ、研究者としての僕は存在しなかつた。これは疑いのないことである。だからファークスの論文を気に留めた先生が、何気なく、「追試しないか」と声をかけたことが研究者人生の発端になつていることを考えると、人生の不思議